

(別紙様式6)

平成 28 年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

申請区分: 萌芽的異分野連携共同研究 共同推進研究
 産学官連携フュージビリティ・スタディ
 共同研究集会 産学官連携課題設定集会

研究課題名: 北極海における海洋保護区の将来像に関する研究

研究期間: 平成 28 年度～平成 29 年度

共同研究員	氏名	所属・職名
研究代表者	大西富士夫	日本大学国際関係学部・助教 (H29 年 2 月 1 日より北海道大学北極域研究センター・准教授)
研究分担者 (拠点外)	大久保彩子	東海大学海洋学部・准教授
	稲垣治	神戸大学大学院国際協力研究科・特命助教
研究分担者 (拠点内)	平譚享	北海道大学水産科学研究院・准教授
	山村織生	北海道大学水産科学研究院・准教授
	綿貫豊	北海道大学水産科学研究院・教授
	榎本浩之	国立極地研究所・教授
研究協力者	森下丈二	東京海洋大学・教授
	牧野光琢	中央水産研究所・漁業管理グループ長
	柴田明穂	神戸大学大学院国際協力研究科・教授
	菊地隆	海洋研究開発機構・主任技術研究員
	原田尚美	海洋研究開発機構・上席技術研究員
	瀬木志央	甲南女子大学文学部・講師

【研究の内容】

本研究では、2017 年 2 月 15 日、16 日の日程で、北極海における海洋保護区の将来像に関する研究と題する国際ワークショップを札幌で開催し、第 1 部会「北極へのイントロダクション」、基調講演部会、第 2 部会「生態系アプローチと海洋生物学的必要性」、第 3 部会「生態系アプローチ：制度と実践」から成る全 4 部構成であった。第 1 部会では、北極海の生態系に影響を与える様々な自然現象（大気・氷河、海洋）並びに人的活動（国際関係、船舶航行活動、先住民）について、各分野の専門家を招聘し、最新の研究動向についての報告をして頂いた。

基調講演部会では、外務省の白石和子北極担当大使にご登壇いただき、日本政策の現況についての講演をして頂いた。また、森下丈二東京海洋大学教授（元国際捕鯨委員会日本政府代表）に、中央北極海における漁業管理レジームの創設について、その必要性の観点から講

演を頂いた。メリーランド大学環境科学センター・チェサピーク生物学研究所のジャクリン・グレブマイアー教授には、北極における生態系についての様々なモデリングの手法について講演頂いた。



第1部会における討論の様子



白石北極担当大使（左）と齊藤北極域研究センター長（右手前）

第2部会では、海洋生態学における生態系把握についての研究の最新動向について、専門家から報告を頂いた。同部会では、ベーリング海・チュクチ海で行われている動的な生態系把握にむけた研究の最新成果、現在進行中である中央北極海の生態系把握の国際プロジェクトの動向等の報告、植物プランクトンの光合成に基づく有機物生産の実態、チュクチ海に輸送された太平洋産プランクトンの定着有無、気候条件に基づく底魚の生息域の分布動向シナリオ等が明らかとなった。

第3部会では、国際社会における生態系アプローチの考え方、南極海洋生物資源の保存に関する条約、ロス海海洋保護区の設置事例、フィリピンにおける海洋管理をめぐるステークホルダー主導（特に現地の漁業者）による海洋保護区設置の特徴等が明らかにされた。

次年度は、本年度に明らかとなった課題、1)特に北極海における海洋保護区の対象とされるべき指標種の検討、2)生態系についてのボトムアップ・アプローチとトップダウン・アプローチに基づく科学的理解を総合化していく上での課題の検討、3)生物多様性の保存と生態系サービスのダイナミックな動態を特定するための物理的要因、生物学的要因、人的社会的要因の特定にむけた検討を重点的に行っていくこととする。

【研究論文や著書等】

- 1) Joji Morishita. 2016. IWC and the ICJ Judgement. Whaling in the Antarctic: Significance and Implications of the ICJ Judgement, edited by Malgosia Fitzmaurice and Dai Tamada, Brill Nijhoff: 238-267. (査読無)
- 2) 森下丈二. 2016. 南極ロス海、世界最大の海洋保護区に: その本当の意味. オーシャンニューズレター, No.403, 近刊予定. (査読無)
- 3) 大西富士夫. 2016. ロシアの北極協調路線はいつまでつづくのか—現状維持政策の要因と修正

主義政策への転換の可能性, インテリジェンス・レポート, 12月号: 65-74. (査読無)

4) 大西富士夫. 2017年. 北極をめぐる新しい動き. 海洋白書 2017, 2017年3月末出版予定. (査読無)

【研究発表】

1) Fujio Ohnishi. 2016. Japan's Arctic Policy in the Globalizing Arctic. Special Lecture, 2016年11月17日, 台北市中央研究院政治学研究所.

2) 大西富士夫. 北極国際政治からみた米国の北極外交戦略-汎北極多国間主義から区分的多国間主義へのシフトか. 第2回北極の未来に関する研究会, 2016年11月28日, 千代田区笹川平和財団.

3) Fujio Ohnishi. 2016. International Relations in the Arctic Region. 1st International Workshop on Future Vision of the Marine Protected Areas in the Arctic Ocean, 2016年2月15日, 札幌市北海道大学.

4) Fujio Ohnishi. 2016. Readjustment or fragmentation? Prospect of Arctic Concert System. Conference on the Geostrategic Transformation of the Arctic in an Age of Growing Uncertainty, 2016年2月17日, 吹田市大阪大学.

5) Fujio Ohnishi. Fujio Ohnishi. 2017. Is the Arctic Concert System ebbing away?. Slavic-Eurasia's Northern Tier: Finland, Russia, Japan, 2017年3月3日, ヘルシンキ市ヘルシンキ大学.

6) Osamu Inagaki. 2017. Fisheries Management in the Central Arctic Ocean: Is There Any Role for the Arctic Council? Conservation of Marine Living Resources in the Polar Regions: Science, Politics and Law. 2017年3月18日、19日, 武漢市武漢大学.

尚、2月15-16日の本研究内での国際ワークショップにおける研究発表は別添資料を参照のこと。

【特許等】

該当なし。

【アウトリーチ、取材、その他】

該当なし。